

最弱の転生者の心の魔法

つらら@ゆき

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

テンプレ転生した主人公が向かった世界はリリカルなのはの世界

だが主人公は前世の親の顔や家事、あとは一般教養程度しか覚えていなかった

主人公が知っているのは神の言っていたアニメの世界に転生したということだけ

そんな世界でこのように生きようとした主人公の巻き込まれる物語

目次

第一話 彼方の体にジュエルシード

1

第一話”彼方の体にジュエルシード”

さてと…現状を確認してみよう

昨日布団に入る↓寝る↓目が覚める↓真っ白な部屋↑今ココ

「うわあ…どこのテンプレ」

「さつてと、状況が分っちゃってるかんじかな？」

「うわっ…なんだただのイケメンか」

「ただのイケメンって嫌な言い方だなあ」

ハイ、急に現れたのはただのイケメンの多分自称神様

なんかもっとおじいちゃんが出てくると思ってたんだけどなく

「んじや、状況分ってるみたいだし質問は？」

「死因は？」

「ん〜つと…えーと…ふむふむ」

Tシャツの内側からiPadを取り出しておもむろに操作し始める
何所にiPad直してるんだよ…ってか何でiPadなんだよ…

「死因は水死だね」

「水の無いところで水死とか…クウガじゃん」

「それ通じるの？」

「さあ？」

通じなかったら通じなかったでいいし…アレ？アギト？確かクウガじゃなかったっけ？

クウガの最終回がもう神がかっててビデオ今でも残ってるや

「んじやサクッと転生特典決めちゃおつか」

「じゃあ〜…」

「このボタンを押してネ☆」

うわっ考えようとしてたのに…クソ。

ちよつとだけ恥ずかしいじゃないか

とりあえず押してみたらカードが四枚落ちてきた

「えーとなになに…おお〜キミはずいぶんと偏った能力を手に入れたね」

「え?」

「まあのちのち分るし秘密だよ」

今は教えてくれないんだ…

「さつてと、んじゃ逝つてら〜☆」

ガコン そんな音と共に地面に大きな穴が開く

もちろん予想していた

「甘い!!」

フツフツフ：家で転生物を読んだ時にもしもの為と練習していた日々が報われる
つとまあ横に飛んだわけですよ
ならまさか其処にも穴があるなんて誰も思わないでしょう？

「甘い☆甘い☆餡蜜に壇蜜を掛け合わせるくらい甘いヨ☆」

「ちつくしよ〜!!!」

「君が行くのはアニメの世界だから〜」

そして世界は暗転した

ハイ、皆さんおはようございます

柊です。え？苗字じゃなくて下の名前はって？柊がしたの名前なんですよ
はじめまして皆さんこんにちは柊です。

親が蒸発しました

この世界の産みの親がです

まあ手の掛からなさ過ぎる気味の悪い子供の自覚は在ったし、僕も二人のことを親と
は認めれてなかったのも原因なんだろうなあ

そんなことを思いつつ小学生になったばかりの僕が転生者ヨロシク一人で生きてい
けるわけも無く、自炊とか家事は出来るけどお金には限界があるものだし、貯金なんて
置いていつてもらえてるわけも無く僕の人生は早速詰んじやいました

そういえばこの世界は何の世界なんだろう

前世の記憶が一応頼りになるんだけど前世の記憶は途切れ途切れだしもうやばいよ

ね！

あ、ついでに言うのと祖父も祖母も僕が生まれる前に他界してるらしく本当に身元は誰に引き取ってもらわないといけないんだらうか

数カ月後

え？時間飛ばしすぎだつて？だつて説明長々とされても面白く無いでしょ？

簡単に説明すると引き取りたいという独身の親戚の男の人が新しく僕の父になりました

「ただいま」

「あ、おかえりなさい」

ちなみにこの人が身元受取人になったので苗字も同じにしました

つてなわけで改めて緋柳 柊です

さてさて、ココで大きな事件が起こってます。なんと原作知識、前世の記憶、その他
もろもろ殆ど残ってません!!やばい!前世の親の顔より原作知識が欲しかった!!!

「柊、学校はどうだ?楽しいか?」

「それなりには楽しんでるよ」

「そうかそうか」

楽しんでるという言葉だけでお父さんは笑顔になって僕の頭をぐしぐしと撫でる

僕はお父さんに撫でられるのは結構好きだ

別にお父さんだからというわけでも無いんだけどあつたかくて大きな手で撫でられると安心する

この人なら自分の親として受け入れられる、そう思つて僕は“お父さん”つて呼んでるし

実際学校自体は嫌いじゃない、勉強が得意だったわけでも無いけどね

みんなが集まつて他愛の無い話をして帰る、そんな風な日常を久々に感じてた
そして僕はだれにも言えない秘密が幾つかある…

そう、僕の趣味である

僕は…女の子の格好をするのが好きだ

それもかなり本格的にする

お小遣いを溜めて買った化粧品の数々に布をかつて自作した可愛い洋服、和服。

休みの日や放課後、誰にも気付かれないようにそれを着て街中を歩いたり喫茶店に入つたり

楽しくてドキドキしてやめられないのだ

ちゃんと声も変えてる。まあ声変わりもまだだからか少しは女の子っぽい声も出るようになった

「すまんがご飯はコレで何かかって食べてくれ。今帰ってきたところだが仕事にいつてくるよ」

「は〜い、行つてらっしゃい」

「行つてきます」

お父さんはどっかの会社のそれなりにお偉いさんらしい

なんでも最近出世したんだとか

そのおかげでか最近毎日仕事付け、体が心配だよ

「今日は〜♪お父さんが仕事〜♪だから朝から女の子〜♪」

土曜日にお父さんがお仕事に行つたので僕はいつももだつたらお昼を過ぎてからにする女装を朝からお昼にケーキを食べに行こうと思つて居るのだ！ちなみに今日はシンプルに白のワンピース

喫茶翠屋、最近近所に見つけたとっても美味しいケーキ屋さん

お値段もリーズナブルで僕も良く行くお店なのだ

そしてこのお店の娘さんで僕の唯一に近い友達なのだが…僕のことを男の子だとは知らない

学校は同じなんだけどね…何故か僕が僕だとばれないんだ

「いらつしや〜い」

そんな説明をしてるうちに翠屋とうちや〜く♪

「あら？ 柊ちゃん！ ゴメンね、ちよつと今人が多くつて相席でも言いかしら？」

「ハイ、お願いします」

「丁度なのはが居るわね、なのは〜柊ちゃんがきたから相席させてあげて〜」

「ハイなの」

あゝなのはちゃんだら、いつも通り笑顔がまぶしいなあ

今日は何を食べよっかな〜

「こんにちわ柊ちゃん！ 柊ちゃんは今日は何を食べるの？」

「サクサク生地のイチゴたっぷりフルーツタルトと紅茶」

「了解なの！私はショートケーキにするんだ〜分けっこしようね柊ちゃん」

「うん♪」

二人で食べさせあいっこしてケーキを楽しんだ後はなのはちちゃんと一緒に遊ぼうと言われて断る理由も無かったので取り敢えず部屋に向かうことにした

「ねね、柊ちゃん。ひーちゃんって呼んでも良いかな？」

「ひーちゃん？別に良いけど…」

「やったの！えへへ〜♪ひーちゃん」

「なに？」

僕が返事を返すと えへへ〜 と笑い返して 何にもない って言ってくる、そんなやり取りを5回くらい繰り返したらまさかのなのはちちゃんがあだ名を付けるなんていつてきた…

無理無理、思いつかないってば…

「う〜ん……」

「思いつかない…の?」

「あはは〜…こういうのはちよつと苦手ですね〜」

するとパツと思いついたのでもいいから気が向いたときに呼んでって言われたよ…

一応この話は一転して恋愛の話になったわけですが…

「ん〜…アリサちゃんは隣のクラスのロングの男の子が気になってると思うの」

「そうかなあ〜? アリサちゃんはどちらかといえはなのはちゃんのクラスの椽くぬがさきヶ崎君のことが気になってるんじゃないかなあ〜?」

「それはそうとして〜…ひーちゃんはどくなのかな〜って思ったりしてるの」

「僕?」

僕は…どうしたものか…恋愛感情がまず湧いて来てないけどそんな事いつたらしらせ
けちやうだろーし

「僕は…今はなのはちゃんとアリサちゃんとすずかちゃんのが好きかなあ〜…えへ

へ」

「えへへ〜うれしいの！私も大好きなの！」

「次はなのはちゃんの番だよ〜？」

僕はなのはちゃんに話題の標準を合わせる

僕は例外としてもなのはちゃんは今頃から恋愛感情が生まれ始めるお年頃なはず
だったら気になるこの一人や二人居てもおかしくはないよね！

「え〜と…え〜と…私は…どうだろ？わかんないの」

「ずるーい！にげたー！」

「なのは〜？塾の時間よ〜？」

「はいなの〜!!」

「あちゃ、そんな時間か〜」

なのはちゃんは塾に通ってる、僕は一応復習に近い状態で勉強できてるから成績は問題ないけど一応は名門の小学校、そこから辺の中学校よりは勉強がすすんでる

なのはちやんとはココで別れていったん帰ろう

「んじや今日はココまでだね、ばいばいなのはちやん」

「はいなの！ばいばいなのひーちゃん」

なのはちやんと別れて大体10分くらい経ったところか家へと歩いているとキラキラ光る青い石を見つけた、キレイな石…もしかして飛行石!?とか思ってみただけ中にはローマ数字が書いてあるだけで飛べなかった…ジャングルジムから飛び降りてみたのに、くそう足首が痛い

取り敢えず家に帰って夜が更けて来たくらいだったか

もって帰ってきた飛行石（命名）が急に光ったと思ったら浮かび始めた

「やつぱり飛行石?!?ってことはラピユタは実在する!?!」

って事はコレはアレか!?!掴んだらラピユタまで飛んでいけるって事か!?!

両手で確りと掴んだ瞬間開いた窓から飛び出す飛行石

「うわわわわわわ!!!死ぬ!落ちたら死ぬ!!!」

あんな映画みたいにゆっくりなんて飛んでくれなかったよ…体感速度60kmは
在ったよ

んで、到着したのが病院…かな?多分病院

「でもなんでこんな所に…」

——グルルルルル

うなり声が聞こえる、それもただの動物とは全く別物の本能が危険信号をガンガン鳴
らさせるよううなり声だった。僕の脳内アラームがガンガン警報を鳴らしてる、ココ
はヤバイ!帰ろうとした時、背筋が一瞬で凍りついた

——グルルルルル…

僕の後ろに居た黒いモヤモヤから大量の触手がうねうねとうねりながら僕に襲い掛かってくる

THE一般人な僕がそれを避けられるわけも無く、手足に触手が絡み付いてきた

「僕の触手プレイとか誰得なのさー!!!っひゃん!!!」

触手が僕の服の中に入ってくる

背筋をなぞられ耳を弄られ鎖骨や首筋などを優しく撫でられる

「ちよっ…やめっホント…誰ときゅ…ひゃん」

さて…コレが行われているのが僕の目の前でさらには女の子がされていたのなら大変福なのだが残念ながら僕だ、しかも女の子の格好はしているが僕は男だ

あれ?そんなことを考えてられるってことは意外と僕って落ち着ける?僕大物?

次の瞬間黒いモヤモヤが僕の口に触手を近づけてきた

「え?もしかして…コレってお決まりの!?っんぐ!?!」

ん？なんやワイに視点がむくんか？ちよつと主人公みたいでてるなあ

「そんなことより、さつきから聞こえてる声、ユーノ君なんやろなあ…：しゃーないし行つたるか」

とりあえず原作介入しておもしろい人生送りたいし転生するときにもろた能力つちゆうんも使つてみたい気になるしの、いっちょキメたるで！

や
それで動物病院内走りまわつとつたらユーノ君にでおうたわでもココはスルー一択

まあココは取り合えずなのはちゃんに任せといてワイはジュエルシード探しに行つたろか

ちよつと歩いたくらいん時に誰かの声が聞こえてきた

「——触——なのさー！」

女の子か？ちよつと可愛い声が聞こえてきた
その声のするほうへ歩いてつたらそこに広がっていたのは…っ!!!

「なん…やて…?!?…これは…眩し過ぎるで…」

☆触☆手☆プ☆レ☆イ☆キターーーーーー☆

なんやこの俺得な状況は!!しつかも襲われてるんが黒髪ロングに白のワンピースやと!?!
ごつつ好みやんけ!!!神様、おとんおかん!この世界に産んでくれてありがとう!!!ほんま
感謝感謝や!!!

「ちよつ…やめつホント…誰ときゆ…ひゃん」

しかもこの触手わかつとる…まずは全身を優しく愛撫するって言う触手プレイの基
本をわかつとる

コレは…さすがのワイでも助けに行けへんで…すでに軽く前屈み状態や…

「え?もしかして…コレってお決まりの!?っんぐ!?!」

「ア…アギ？グガガギ？ギヒ…シガ？ギャヒヒ…ア、アア…」

こりやどういうこつちや…こんな原作になかったぞ…

とかそんな悠長な考えしとる間にいつの間にか目の前に奴がせまつとつた

「アハハハ♪」

「ぐう!!!」

バリン!!!子気味の言い音を立てて割れる窓ガラスから吹き飛ばされて出てくる

こりやちよつとヤバイで…ガードした手の感触がもうなくなつとる、折れては無いやろうけど使いもんにならんで…こりやはよなのはちゃん来てくれよ!

「にやつ?!?橡ヶ崎君?!?どうしてここに…ってあれ？ひーちゃん？」

なつ?!?なのはちゃんの知り合いなんかこの子?!?知り合いやからか普通に走って近づいてって

「危ない!!!」

ワイでも目で追えへんような速度で動いた奴に第三者の声が入ってきた
ユーノ君や！よっし！コレでなのはが変身してくればそれで勝ちや!!

「え？え？え？」

現状のみこめとらんなこりや…まあその辺はユーノ君に任せてワイは時間稼ぎをが
んばらせて貰いましょうか

「さつてと!!いったるで!!!」

「ギジャツ♪」

血湧き肉踊るつちゆうんはこういう殴り合いのことを言うんやろうな!!!

自然と笑みがこぼれよるわ！まあワイの方が圧倒的に弱いんやけどそれでもや！全
力での殴り合いや！小細工なんてする必要もない、ガードなんて邪魔なだけ、する暇あ

るなら兎に角殴れ!!!

「やっぱ…」

ワイの戦いのリズムを覚えたんかクロスカウンターぶち込んできよった…っあゝ…
効くわコレ

やけどワイもその程度で倒れるわけにもいかへんで!!!ワイが蹴りを放ってきたんが
想定外やったっぽいな、顔面にクリーンヒットしたわ

でもな、次の瞬間ワイはゾツとした

さっきまでのが只の遊びやった、そいつを本気にさせてもうた、そう感じた

顔から笑みが零れた、さっきまでも笑みはうかんどった、でも今ほど狂った笑みは浮
かべては無かった

せやけどワイはにんまり笑ってこう言って倒れといたるわ

「ワイの勝ちや」

ワイの背中の方からピンク色の光が柱を作る
コレで、エースオブエースの誕生や
ココでワイの意識は闇に落ちたわ